

「小町」35-37

人皇 1148P

お 294P

4091P

「小町」35-37
初校 81P

563.53(4)国
4095P
131P

現実 4096P-3/25
2910P

4/11/2019

第七十六章 太子の苦悩

大倭国（九州）から倭国（近畿）へ
故郷・歴史・祖霊を移す

① 実際の歴史を基にしているとはいえず、大倭国（肥後国）を「天上の国」に見立てて展開する「神の御世の物語」が「事実を基に」しているにもかかわらず「いわゆる神話として」完成した「晩」には「あくまでも」天上の国での話である」という前提に固執しなければならぬ。

神話の中に折り込まれた地名を見て、それが火の国（肥国）の地名だとすぐに分かってしまうようでは困る。決して、それと悟らなくてはならないのである。

② また大倭国（肥後国）の史実をあたかも大和国における話であるかのように置き替えて述べる人皇（神武天皇以降）の世の物語において同様である。あくまでも大和国での話だ。大和国であったこととして記述せねばならず、後代の著述に事実を察知されはな

いこ 以後 4095 18年 一切 1084 戒部 城とくわと 国映の 2090 11と制 38 踏みめ 4092P

こお 凍る 766P

「とこで」 4106 4095 4102 10年

らなりのである。
■ところで、———こうしたことは、一体、何を競味して、いるのであろうか。
■この編纂の作業に取りかかった当初から、漠然とながら頭の片隅で分かっていたというものの、———かし、いざ将来の状況を直視するとき、太子と馬子の弾んだ心は凍るように冷たくなっていた。
■我が国の揺籃の地、邪馬台国のこと、を、国史のどこにも、それと明確に記すわけにはいかなないのである。
■心のふるさと邪馬台。こよなくいとほしんできた山や川や海。はるかな昔から、先祖代々自らの足で踏みめ、歩いてきた豊かな大地。建国以降の輝やかしい、真実の歴史。———そして、我が国の要らるべき都として現出した震わくも目映いばかりの壮大な都城。
■ここのことについて、一切、それと分るように記述してはならないのだ。

(*)

2910¹
4357

2110 永久の次 4,093^P
陵墓 永代 401² 489

4045¹
4046¹

4045² 21斤

そうきおん 146¹
創生
帝王として口をはしめる
口の基をたてること

そうせん 1290¹
壮絶
はたはた 壮絶なこと
秘めて 壮烈なこと

せまじき
天土 1239¹
わすめ
土地

大倭国の寸土さえも、この長久の歴史を支
えてきたのだった。そして大倭国の大地の一
木一草までもが、この壮大極まりない歴史を
培ってきたのだ。
こんなにも確かな歴史を育んできた創業以
来の故郷を、——今、自らの手で、国史か
ら完全に放逐——ようとしているのである。
それはあまりにも酷いことでございます
馬子は、身を震わせながら言った。
太子は、言葉もなく、答えを探し求めた。
馬子は、さらに言った。
「天孫が天上の国から大和国へ天降ってき
た」と記すのは、これまで私達の祖先が大
切にしてきたものの多くを、現実の世界から
永遠に葬り去ってしまふことにはなりません。
そして又、祖先の御霊が眠る墓所さえも
天上の国に大倭国に、現状のまま置いて
おくというわけにはいきまいと思われま
す。
——かゝあえて申せば、——せめて陵や
墓だけでも、——と——おきたいものです。大

太子の目には、うつろい、光る影も42043の目
頬を伝い4047溢れる55 瞑目 2466
この

4.094^P

おぼろ 1318
心な 1158 への奥底

くろう 2638
昔は 悩むこと

てあら 半禁 1518
電 永く
思い定めて
安住の地と思ふ

倭国こそ安住の地と思ひ定めて、安らかに永く
の眠りについてゐる祖霊の塚を、突然にも
手荒に揺り動かすようなことが、どうして出
来得まいようかし
消え入りそうな小声でつぶやく馬子の言葉
を、太子は胸掻きむしられる思ひで聞か
たか、やがて、心底の思ひを絞り
出すように、こう言った。
「うむ。―――たーかに、空恐ろしい事態に
なるものよ」
――
太子は、馬子の切なる願ひを我が事として
受けとめ、そつと手を合わせると静かに瞑目し
た。
／＼私の心は苦しいやうございます。いかに
の日本国の未来の爲とはいえ、―――私の胸
は張り裂けそうです
閉じられた瞼から溢れる熱いものが、とめ
どなく太子の頬を伝ひ、したたり落ちていっ
た。

＊

事態

こと

H5.5.4(火) 大和 元明以後 2233
 49.1.18(土) 聖業 小舞 787
 4095 5635.4
 1870 1660

以来の聖業の地と仰ぐことになろう

夢殿の内に、暫時、重苦しい空気が漂った。
 太子は、自分自身の心を納得させるかのよ
 うに、毅然としてこう言った。
 「都を東へ移し、都人達もまた皆東へ移っ
 た後に、いつ迄も、はかなく過ぎ去
 ったままの昔にのみ拘泥して、いつ迄も、
 懐かしく大切な思い出は、時の流水に磨か
 れ、美しいものになつてゆく。そうして建
 国から後の麗しい出来事が、神話のなか
 にあつて悠久の生命を得るならば、すばら
 いではないか。祖先たちが歩んだ歴史は、
 神話として、永遠に輝き続けるに違いない。
 それにまた、我々の故郷はなくなるわけ
 ではない。創建後の故郷や、歴史等々悉く
 がこの畿内に移さるのだ。我々
 の子孫は、この大和国（倭国）をこそ、皇祖

天照大神は
 神武天皇の御

気配
 夢殿

523お7
 ハ(重) 云 786
 523お7
 ハ(重) 云 786
 とお
 外 子 元 1587

馬子うまこは、小さく

馬子は、小さくなづいた。

太子はさらに、こう言った。

祖先の霊を移さなければならぬといふ

現実には、たしかに大変な苦しみと、
気が咎める。

い
か
し
、
先^{せん}祖^そ達^だの陵墓^{りやうぼ}の全^{ぜん}てか、大^{やまと}和^わ国^{こく}に

な
く
て、
—
都
か
ら
遙
か
に
遠
い
僻
遠
の
地
に

絶たれたかのように存在するならば、かえ

フて不自然で、奇妙なのではないだろうか。

今までにも、改葬の例がなかったわけでは

な
い
そ
れ
に
祖
先
の
御
霊
も
王
都
の
間
近
に

子孫たちと共にいる方か、より心安らかに眠

あ
る
こ
と
で
あ
ろ
う
い
あ
え
や
ま
ひ
ふ
あ

ちか頃は頻繁に火を噴き上げ

たり
大地を震わせた
りして
い
る
。

↑↑↑↑↑
こいういう情
況を考えてみても、
都

はかりでなく先祖の霊もまた大和国（倭国）へ

移した方がよいのではなからうかと思わ

さ
L
さよう
ふみさと
おも

左様でございまして。
故郷を想うあまり

ついで、先のことが見えなくなつておりまゝ

たし

「いやいや、――の現世（げんせい）を生きている

現代（げんだい）の我々にとつての故郷（ふるさと）は、あの大使国（あの大使国）（九

門）であり、その故郷を忘れてしまわなければ成り立たないこの目論みは、~~我~~^身を切り刻むように非情で

嘆かわしいや私とて辛

ふたり

かな

そしてこの悲しさを、二人だけでなく、

それが分かるだけに下なお一層、私の心は揺れ

動いていったのだよ。――かし、その一時の悲し

みたまどめさ水かけがえのない大局を

見誤ってはいならない、と改めて思い直して

いるところなのだ

*

焚書坑儒 元 1978^p
前頁13行

と足履のついでに
た

833

さて、実行となったら、——当然
なから、完璧を期さなければ全く意味がない
わけである。
■そこで、先ず第一に、
へ何は立ておき、——後世へその事実を
伝えるであろうものの一切合切を、ことごとく廃
し去らなければならぬ。
と思われた。
■特に、
へ日文字に記されてゐる物は、恐ろしい
結果をもたらすことになる。
●例えは、書籍・来歴などをしたためた書状
銘のある刀や鏡等は、この世から抹消しな
ければならぬ。
と想到された。
●というところは、
へ「小等、文字が記されてありとあらゆる
物を、徹命により、徹底して掻き集めなけれ
ばならぬ」
というところに他ならなかつた。
■日本国中、津々浦々の神社・仏閣・諸豪族

等へ嚴重に申し渡して、保有する文字という

全部 余す58 2264 厳罰 4.100 由緒 2242 所期 115 全て 4101-3/4

文字の全てを、洗いざらい目皆に
 ねばならない。
 屋敷内や倉の中などにある品々についでに
 論々、代々の先祖が葬られてゐる墳墓
 中の副葬品の数々にも目を凝らし、
 見落しがないように留意する必要がある。
 いかも、一度や二度督促したくらいでは、
 その所期の目的を到底達成出来はすまい。
 親・子・孫と数代にわたって根氣
 よく集めることになる。金目系
 もつとも、それでも家室と称して供出
 をしづる者があるかも知れない。
 また、神社・仏閣・諸豪族等由緒書・古記録・その
 他の剥奪に対して強い反発を示す場合も予
 想される。
 しかし、そういう時には、止むを得ない
 厳罰をもつてでも応じさせるしか
 あるまい。
 何の出口があるわけでもない無辜の民が哀れ
 だと言つて、手を弛めるようなことがあつて
 はならない。心を鬼にして、全部の文字を余

4101-3/4 59

かんやう 元 439 主んみ 今 608 成り立つ 1676 評価 4104 836 果て 336 水泡に帰す 1176 試み 389 仕組む 956 「食す」 9K
 分目 2371 4,101 - 1/4

すところなく集めるのだ。
 ④ 仮りに、たった一つを見逃したとしても、
 その一つによつてこの国史に仕組まれた絡
 線が露見し、ひいては、「神話」や「万
 世一系の系譜」と異なる日本来の歴史が現
 われることになるかも知れないわけである。
 ⑤ もちろんそうなら、悠久の平和を願うこ
 の試みは、一瞬にして無意味なものへと変わり
 果て、全ての努力が水泡に帰すこととなる。
 ⑥ また、後世の人々からは、我国の歴史を故
 意に曲げ、かけがえのない貴重なものの殆ど
 を葬り去ってしまった愚かな事と酷評される
 であらう。
 ⑦ わずか一つといえども、重大な事実が記さ
 れている物を収集し損ったなら、この計画は成
 り立たない。
 ⑧ 日本国中のありとあらゆる文字を残らず
 集め得るか否か、この国史編纂事業の成否
 を決する肝要な分目になる。

H5.5.5 水
H9.1.18
H11.10.15
H12.6.21

4,101^P-3/4
抹殺 2083^P
抹殺 4093^P 16^行

物品 4100^P
管理 保管 4119^P-1/3 13^行
~14^行

＊

と言つても過言ではない。
全国から集結された文物は、数代の子孫に
至る迄大切に、厳重に管理されることにな
らう。
しかし、これらの品々は、その存在
の有無さえもが靡げになつてきた頃を見はか
らい。――人知れないよう極秘
裏に、我が国の永遠の未来の爲
から抹殺されなければならぬ。

4/101^P-3/4

ほうみん
宝算 2015⁸ 記(国)21⁰
香聖 天の命
天子の命

④4099⁸
書物
文書

な お、日古事記の序文に、
「諸家の賣てる帝紀および本辞」云々
の名・皇居・后妃・皇子女・重要な事績・空
算へ聖寿・崩御年月日・山陵などについで
の記録」および日本辞に「神話・伝説・歌
謡・氏族の縁起・芸能などを中心とした伝承
云々」
という記載がある。
ここに、
「諸家の持てる帝紀および本辞」
と記述されているところを見ると、
へ往古において「諸氏族がそれぞれに
日帝紀および日本辞」を持っていったのであ
ろう。
と解される。
しかしながら「察するところ」
へ「諸家の持てる日帝紀」や「日本辞」をは
じめとする書き物は「ことごとく」
「夢告以降のかなり早い段階で、没収されて」

4.101^P-4/4

まった ✓

ものと思われろ。

12.5 数多く存在してゐたと思われろ。

■書いて 日帝紀、日本評などの往

古の書物が、後代に一冊も伝えられていないと

ころを見ると、——やはり、ひそかに、茶

毘に付されてしまったのであろう、と想像さ

れる。(まぼろしの邪馬台国 宮崎康平 講談社 三六頁参照)

■さらに、あえて述べる、

へこのころの日帝紀および日本評にこそ

我が国の元来の歴史的事実が書き綴られてい

たに違ひない ✓

と推察される。

✱

2048
 馬通(63)
 敬丈高 117
 忘却 178
 命 719
 4.108
 1657
 古事に冒頭
 1610
 史記(黄上) 45~46
 267
 初校108下左

治民にあたる者は、民が口をひらいて
 十分に議論できるようにしてやらなければな
 らない。口をふさいだら長くは安寧を保てな
 い。(史記)中国の古典より五八八年六月初版第一五刷発行
 とあり、人々の口を封ずる(こと)のむつかし
 が示されている。
 平氏社 四五、四六頁参照
 途轍も無い困難が予想されます。とうて
 いく為に遂げられようには思えません。
 口誰もがよく知っている我が国の創建以来
 の歴史は、正史と違っており、多
 く虚偽を加えたものである。だから、決して
 信じてはならない。(古事記の序)
 と厳命し、
 国民全ての着達の記憶の中から、口真
 実の歴史を完全に駆逐し去る。
 といったことが、本当に果てし可能なのであ
 りましようか。
 家々にはそれぞれ祖先から当代へ至る
 までの由緒正しい血筋を示す自慢の家系図が
 あり、そして祖先達が打ち立てた誉高い武勳

おと
実1やか 2073P
ミ

4.109P

563.5.12(中)

ちからずく
力尽 4107P左

ことわざ事典485P

百行114P
人口

こと

伝承

伝 1547P

口承

742P

(人の口には...
人口にかなう)

口承に伝わる

せんざい
千載 1264P
(4年)

は、大切にされ、千載の後にも
よとばかりに、代々、伝承されてい
のです。

たとえば我が国の歴史をすつかり作り変えてし
まうことが公には出来得たとしても、親
子・孫・曾孫へと口伝に伝わる祖先達の数々
の武勇や、その活躍の歴史的な背景についで
の口伝を、どうして封じ込められ、もうことが
出来まいようや人の口を閉ざすことが出来
せよとは、とても考えられませぬ。

馬子は、首を横に振りながら言った。
「しかし、太子には、必ずしも不可能だとは
思えなかった。太子はこう言われた。

「人の記憶や伝承は意外と曖昧であ
って、思い違いのことや、大きく誇張さ
れたこと等も多く言い伝えられている。さら
に、ゆかにももつともらしい作り話まで
まことしやかに語り伝えられていくものだか
ら、これらのどれがどこまで正しいのかの識別
することはさへ困難である。

では、
次頁4行

④ 4.100 139 F-
(こ)

1408 1054 成果 1215 拘泥 950
で主語からた 文字の意味
を主語。で主語

4.110 991 至上 969 証明する
証明する

殊に 816 学識 384 伝内 1553

ゆき 2246 有識 学内あり見識が富い

こういした事実を知っている我々は、
そんなにも頼りにならない口承よりも、書物
に記されていゝる事の方が正しい、とややもす
れば思ひがちなるものである。
たしかに、意識するにないにかかぬらす、
私達には、不確実な要素の多い口伝の伝聞
より、文字によつて記述されたものを尊重
する傾向がある、といえようである。
殊に、例外もあろうが、一般的にいつて
有識者ほど、国内外の書物中の文字をこそ至
上視する傾向が強いようである。
信頼すべき文献や、実証された成果
に基づかないことを述べたならば、妄想と取
られかねないからなのであろう。
それなら、文字によつて書き表わされてい
ない歴史は、どのようにして扱ふべきの
だろうか。
我々ながら、文字のささやかな羅
列の外にはずれた事実を理解
することはなほだ疎いといえようである。
人々のそのような習癖を見抜き、未来を予
測しておられるのであろう。太子はさらに、

すなわち、正史の記述に背を向けるよう
な口伝えは、真実にほど遠い、たわいもない作
り話である、と見做されることになろう。
そのような、正史の記述とは明白に違ふ伝
承か、どうしてそんなことまで、世の中
にまかり通り得ようか。
たとえ、日本当の歴史に含む内容の伝聞
か、子々孫々、細々とながら口伝語り伝えら
れていったとしても、数百年の長い年月の後
には、その口実際の歴史は、

こう仰せられた。
「いうまでもなく、いま手懸けている国史
こそが、唯一の正しい歴史書であると言明せ
ねばならず、この国史に反するものは、
全部「嘘」いつわりの歴史だと言いつくらなけれ
ばならない。」
とすれば、この正史の記述とは大きく食い違
う日本来の歴史の方こそ、何の根拠も持た
ない虚伝の一つにすぎないのだ、ということ
になる。

4.5.11(14) 神代文書
虚年 584[?] 拍車を加え[?] 1774[?]
実年 2073[?] (本)

疎外 2299[?]
疎外 203[?]

4.113[?]

おまて長目の左
(6)

紀上148[?] 一笑に付す 131[?]
言4段を紀上140[?]

佐伯氏の年代
「小野良実はいまから」といわれる

おりませんよ。私の知る限り、天皇の祖先達
が火の国（肥後国）に都を置いていたという
事実はありません。何かの間違ひではないで
しょうか
と生真面目に言うことであらう。
そして又、ある者達は、
「そのようないいかげんなことを申すもの
ではない。恐れ多くも国史に、はつきりと、
へ天孫瓊杵尊が、天上の国の高天原から
日向の高千穂峯に天降りされた」
と書いてあるではないか。そして、瓊杵尊
の曾孫に当る神武天皇が、筑紫国から東遷さ
れた、倭国（大和国）の橿原宮で即位された
のだ。
と言つて一笑に付し、あからさまに眉をしか
めることであらう。
ともあれ、時とともに真実の歴史は疎外さ
れ疎んぜられていくに違ひない。こうして本
当の事を知る者は一層、拍車を掛けたように
極度少なくなつてゆき、——やかて虚と
も実とも定かならない真の歴史は、世間に浮

ぼんを 凡愚 2054 差が かい 886 2076 1591 246 12F199 人福 11本 53 4,114
 何 時 633 1034 136 633 190 512

沿って 微力なりといえども、太子のお考えに
 沿って 尽力することだ
 特異な才の無い凡愚な私のせめてもの務
 特異な才の無い凡愚な私のせめてもの務
 太子は、言葉もなく「……」と太子の
 口許を見つめ、聞き入っていた。
 へこのお方は、いつもながら明快に
 まるで行く末を見てきたかのようにおっ
 やる
 斯様にきつぱりと
 筋書のとおりに、事は成るものであろうか。
 どうしてもそんな邪念が頭をよぎる
 子はい、こう思いました。
 へ太子という御方は、凡人ではない。将来
 を見抜く、人智を越えた力を持っておいでに
 なるのだ。我國の未来の先まで見通して
 そのように仰せなのであろう
 出来得ようか。そのよ
 子はい、こう思いました。
 へ太子という御方は、凡人ではない。将来
 を見抜く、人智を越えた力を持っておいでに
 なるのだ。我國の未来の先まで見通して
 そのように仰せなのであろう
 出来得ようか。そのよ

H29(2017) 1. 1 (日)
令和元(2019) 9. 17(火) ~ 9. 18(3回)

563.5, 15 (日) (土)

4,115^P

$\frac{9}{18}$

馬子は素直に太子の言葉にうなづくの
だった。ややあって

④ 4.096
- 1.25
2.84

領 うな

→H5.5.12(水)⑤

全(11) 4116P

みちのり 212P
道程

いふやうに
成就 1095P
遠大 255P

くもく
胸中の苦悶 646P
4126P-2/3 349

苦悶

すでに太子は、
胸中で、
固く確信して、

た。

事は、成就する筈である。

太子は、この遠大な理想を、是非何と

しても実現させたいと切望した。我が日本

国の将来の爲に、たとえ苦難の道程は遙かに

遠くとも、万難を排して行なわなければなら

ない、と思うのだった。

そして太子は、

私が生きてゐる間に、遂げ得るものか

どうか分らないが、私は心の全てを捧げ

た。そして残された私の命の限りを燃や

し尽くしたい。

と願わずにはおこなかつた。

しかも、気が急かした。

一刻と時を過ぎてゆく。

米

まだ迷っている最中だから、(胸中で)と書いてある

まだ迷っている最中だから、(胸中で)と書いてある

こと しょうらい 将来 1112 563.5.17(4) 偉業 100 105 4117 代償 1338 微塵 211 2263 成就 1095 1589 1992 203 1771

だが、ときとして太子は、
 にくくけつてまいそうになる。自らの心を、
 まさなけねばならなかった。
 事は成就する筈であり、成就させなければ
 ならない。微塵の揺らぎもなかつたが、
 太子の胸の内は、反面、苦しかった。
 未来の日本国の人々に、人知れぬソフト
 もたらす平穏な幸せの代償として失う、過去
 の我が国の偉業・遺産などの計り知れない大
 きさ。――
 を思うとき――――
 線を踏み越えてしまった。よいのだろうかと
 どうして、なお、たぬらわぬのだった。
 馬子と共に、筋書を練り、将来を語り合っ
 いるときなどは、気分も紛れ、意気投合して、
 るものの、一人きりになった時、あるいは道
 行く人々の何ということもない様子に見入っ

草では分りにくい

H5.5.13(木)⑤

S63.5.19(木)⑥

「118」35-38

初校81P

新装6P

京路50P

巻に筆を2024P

4092P

「118」35-37

大正11年11月

4.118

2960P

「118」35-37

大正11年11月

563.5.18(木)

563.5.18(木)

「118」35-37

大正11年11月

563.5.18(木)

563.5.18(木)

「118」35-37

大正11年11月

563.5.18(木)

563.5.18(木)

「118」35-37

大正11年11月

563.5.18(木)

563.5.18(木)

「118」35-37

大正11年11月

563.5.18(木)

563.5.18(木)

ていつの時など、――太子はふつと我
に帰り、胸―めつけられるような重苦―さに
襲われ、いる自分自身を見出し出すのであっ
た。
「なぜ私、このような苦―くて切ない
妄想など、抱―いてしまったのか
あのとき、一瞬怪―しく閃いた理想は、決―
て抱―いてならぬ悪夢だ、たのか
金―人が教えたもうた煌―びやかな理想と思えた
ものの正体は、――あるいはも―かいたら
地獄の責―めであり、一切合切を焼―きつくさずには
おかない焔―摩の火であつたのだらうか。
● 我国の眞実の歴史を、大きく書き替へ
祖―禰達か代々こよなく慈―んできた美―しい京
都の地を、阿蘇の火―山灰の降―り―きりにまか
大―倭国へ九州―を
● 永遠の安―住の地と思ひ定めて安―らかに眠―つ
てゐる祖―先達の魂を揺―り起―こし、夢想だに―な
かゝたであらう東国(近畿地方)へ強―引に改葬し、
我国に現存する書籍と、いう書籍、文字とい

コクヨ ケー20 20×20

4.119^p-2/3

みき子孫に返却したのであらう
まふハ膏油でみかいて文字の無いもの
に貯める寶物々今皆其の子孫に還せしとのた
トミ子孫に返却したのであらう
マフハ膏油でみかいて文字の無いもの
ニ貯める寶物々今皆其の子孫に還せしとのた
ミキ子孫に返却したのであらう
マフハ膏油でみかいて文字の無いもの
ニ貯める寶物々今皆其の子孫に還せしとのた

→ 変革云2001¹ 変改云2003 = c
其 北和様云2003¹ 変改云2003¹ 変革
全了 蒙昧云2083¹

4124-1~39 858
合カ5T2u

電# 223
陸上 109
③ 3233

4.120

犯す 285 既 市 1213 見え 2105 痛ま 119
辛食 2183 溜ち 66
563.5.20 5117 563.5.20 5117 563.5.20 5117
2121 1379

太子の心は、耐え難い重圧の下で喘いでい
た。いまは、その道程の行く手に次々と起る
であろう凄惨なまでの痛ましい有様をおもい
決断が躊躇されるのだった。
「ああ、――既の事で、取りかえーの
つかない大きな過ちを犯すところであつた。
もう決いて、このような妄念など抱いてはな
らない」
太子は、自らに厳しく言ひ聞かせた。
消せるものではなかつた。
――かし、カラカラに乾ききつてゐる燎原に
広がった火がなかなか消えないように、
太子の心の奥深くから燃え上がった火は、いま
さらどんなに努めてみても、そんなに容易に
斑鳩宮の費に燃ゆる火の火村の中へ心はあつた
其所此所に燃えてゐる火を消しても消して
も――気がつくといつても四面に火があ
り、その火は以前にもまいて烈しく、メラ
メラと燃え盛つてゐた。
行きつ戻りつ大きく揺れ動く心をどうす

千々 1426' 斬り結ぶ 593' 4/21 P
命から延び 4/24 349 244

1412' 信条 1152' かねて信は事柄

73油 堪え難い 1354' 全うす (1843) 2084' 断行 1409' 信念に従ふ 4/23 109
4122 87 千後至馬 409' 1983' おはして行くこと

も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日
も 続い ても 出来 ない 苦悩 の 日々 が、 幾 日も 幾 日

あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。
あ く ま で も、 理 想 を 求 め る べ き か。

太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来
太 子 の 心 の 内 の 葛 藤 は、 日 本 国 の 将 来

太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。
太 子 の 心 は、 千 々 に 乱 れ た。

こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。
こ と は 出 来 な か っ た。

差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び 差 延 び

115.5.14 (a) (b)

L 付 固 4/24 11 行

$4, 122^P$
 $563.5.2$
 10767
 -1693

1821[↑] 1821[↑] 1821[↑]
 1821[↑] 1821[↑] 1821[↑]

延のべに現われようとする前触もなかった。
 「どうしたら甘くて薰り高い誘惑にも似た
 未来への想いを、私は断ち切れると
 出来るのだろうか。——いや、私にはもはや
 逸り立つ我が心を押え付けておくことなど
 出来そうにも思えない。」
 「しかし、本当にいいのか。このまま、私の
 理想とするところを貫いて——まって良
 いのか。太子の苦痛の声は、ただ虚空をさ迷うばかり
 であつた。」
 「とはいえ、いつまでも逡巡してはいてよいと
 思ふのではない。両者をただ単純に比較することなど出来な
 いから、——どうあつても、二者択一、どちら
 か一方のル―でも優つていると思われ方を、
 あるいはどちらが悪くはないと思われ方を
 早急に選んで、決断せねばならなかつた。」
 「もしも、私の理想を胸の内に閉じ込め
 この東海の島の未来を時の流水にまかせてし
 まつたら、必ずや近い将来、我が王朝は終焉
 の時を迎えるであらうで

小倉山 713°

想 小林 398°
頭の中を思い
うかべる。巻 2

4.123

電 311
全うする

而 1354°
而 1343°

はぐ 1773°
美 130°

せん 1267°
祥 104031 米

そして、曰、禪讓に
よつて新たな王朝が
生じた時、我々がこれ
まで慈み育んできた
過去一切は、いかに
ないがしろにされる
か、あるいは最悪の
場合、徹底的に破壊
されるであろう。
いかにせよ、その
ような無情な有様を
なすところなく坐し
て見守るだけの度量
が、私に有るか。
いや、私にはどう
てい耐えられそうに
ない。やはり私は、
信念に従つて、残
る我が命を全うす
しかないように思
われる。人々の大
きな苦しみや悲し
みを想うとき、心
は激しく痛む。
しかし、どちらか
を採択せねばなら
ないものならば、
今無為に過ぎ、未
来に大きな禍根
を残す安易な道
を行くよりも、一
から以降の数百年
の長きにわたる苦
しさがある。と
望む。どんなに大
きな山嶺な道をこ
そ歩いて王道と
爲したい。

411.10.16(土)

H29.1.6(金)

H30(2018)10.17(木)~10.18(4回)

令和2(2020)5.8(金)~5.10(4回)

令和3(2021)3.3(木)~3.6(4回)

3/16 F 3/5

3/4

4.124^P

① 演 5行

⑦ は、理想家 な 中
L ⑧ 4122^P 未4行

やり行て 1676^P
Cは元 前頁 ④ 411^P-3/3 11行~

374 流転 2338^P
1分 前頁 14行

々にまかせることによよう

米

いうまでもなく、流転極まりないこの世の将来が
はたして私が描いた理想通りとなるのかどう
かは分からない。思い
けれども、我々は、未来に理想とする目標
を定め、その目標に少しでも近づけるよう
に努力を続けてゆくべきであらう、と思われ
る。
私は、達成してほしい我が国の未来の理想
の姿を大きく掲げ、――――それから先の
叶の成り行きにつけては、後の世に生きる人